
貴女は強すぎる

棕一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

貴女は強すぎる

【Nコード】

N0975Q

【作者名】

棕一

【あらすじ】

絵本で見た、ひとつだけ願いを叶えてくれる魔法の飴玉。それと間違つて幼稚園生だった私が食べてしまったのは、異界の地でバラバラに砕け散ったクリスタルの欠片だった。それから十四年後、私の眼の前に異界の住人が現れる。私と彼らの、クリスタルを探す旅が始まった。*女主人公異世界トリップもの*NOTチー トNOT勇者設定*キャラとの交流に特に重点を置いて書けたらと思います。

1 貴女は突然すぎる

まだ幼稚園に上がって間もない頃、私はその謎の物体Xを見つけた。

赤と紫の混じりあった親指程度の大きさのそれは、内側から滲み出すように光を発しながら宙に浮かんでいた。いまなら神秘的な雰囲気だったとかああだこうだ言えるけれど、あの時の私はただ綺麗だなーとしか思えなかった。人生経験が乏しいから、宙に浮いていることにもさほど疑問を覚えず受け入れた。

つるつるの脳みそで自分の立ち会っている現象と似ているものを検索すると、幼稚園児のお友達、絵本で得た知識が該当した。詳しくは覚えていないけれど、あれは確か魔法の飴玉が出てきたシーンだったと思う。同じように浮いてたし光ってた。

だから私は、なるほどこれは魔法の飴玉なんだなと納得した。

だから私は、絵本の中の女の子のようにそれをつまみあげ、眼前提で持つてくると

「た、た……食べちゃったんですか？」

コクンと頷くと、金髪に緑の目の私と同じくらいの歳の少年は信じられないといった表情を浮かべて私を凝視する。いくら見たって意味ないよー。あれはとくに私のお腹の中。それも食べたのは十年も昔の話なんだから、消化されちゃって栄養になっちゃって跡形もないんじゃないの？

「そんなあ……」

少年は今度は目にいっぱい涙をためてメソメソと泣き始めた。くるくる巻き毛に睫毛バツバサで、そこらの女の子なんか目じゃないくらい可愛いから、泣かれると大変困る。まるで私が悪者みたいだ。

「で、さ。わかったならさっさと出て行ってくれない？ いい加減警察呼ぶわよ」

そう言うと、少年は顔を上げて「警察？」とかわいらしく首を傾げた。本当に可愛いな。絵本に出てくる天使にそっくりだ。惜しいのは育ちすぎてるとこかな。私より頭一つ大きいもの。まあ例え私よりちっちゃかろうが駄目なものは駄目だ。泥棒は……泥棒にしちゃあやけに目立つ格好をしているけど。

ここは私の部屋。ファミリー用分譲マンションの最上階の一室。昔住んでいた賃貸で泥棒にはいられたこともあって、その教訓を生かして今時らしいセキュリティのしっかりしたマンションを購入したそう。ローンの返済のために、夫婦共働きでせっせと働いております。

そんなお父さんお母さんの努力を嘲笑うかのように、コイツは私の部屋に突如として現れた。

私がつたまたま寝坊して家にいたからよかったものの、普通は誰もいない時間帯だ。

いやあ本当によかった私がいて。

あーよかったよかった。

「よかったよかったさあ警察に電話しよつと」

わざとらしく言いながら携帯電話を手に取るが、可愛い顔にコスプレみたいな服装という泥棒に向かないにもほどがあるナリをした少年は、私の言動に慌てるどころか興味津々に私の持っている携帯を見つめている。

「これ、なにかわかる？」

「え？ えつと……箱ですか？」

うん、こんな薄っぺらいものの中に何が入るっていうんだろうね。
……うーん……まいったなあ。

状況を整理しよう。

まず、寝坊した私はゆっくり身支度を整えて朝食を済ませると鞆を取りに部屋に戻った。

するとそこには金髪の美少年コスプレイヤーが。

なんて派手な泥棒だと目を丸くしている私に気がついた少年は、「クリスタルはどこですか！？」と詰め寄ってきた。しかしそのクリスタルというものがよくわからない。

もしかしたらコイツは泥棒に入る家を間違ってしまったのかもしれないと思った私は、クリスタルとは何ぞやと説明を求めた。

するとコイツは、

「僕たちの一族が代々守っている宝石なのですが、悪しき者がそれ

を求めて一族の里を襲ってきたんです。

僕は里から宝石を持ち出し、追っ手から必死に逃れたんですが、その時の攻防で宝石が砕け散ってしまい……気がついたらここにいました」

とトンだ厨二設定を披露してくれたのだ。もちろん厨二病患者になんか構ってら会話れない。丁重にお帰り願おうと思ったところ、コイツは聞いてもいないのにクリスタルの特徴をベラベラしゃべり出した。

するとまあなんとということでしょう。それが、私の幼少時代に飴玉だと思っただけで食べてしまった謎の物体Xの特徴とぴたりと合致するではありませんか。

いやはや不思議なこともあるものだとちょっと懐かしくなった私は、その思い出を語ってみた。すると少年は泣き出した。まるで私が悪者みたいじゃーんと思いつつまあとりあえずクリスタルなんてものはないのだと理解してくれたと思った私は、お帰りいただくとうと携帯を見せつつ脅迫……もとい説得したのである。

しかし少年はまるで生まれて初めて携帯を見たんですーみたいな態度を取った。もう自分の作った設定にどっぷり浸かっちゃっているのね……。

警察を呼べば速やかに少年を引き取ってもらえるだろうけれど、何かが引つ掛かる。

さっきから何かが気になってしょうがないのだ。

もう一度じっくり少年を見つめる。

金色の巻き毛に長い睫毛に縁取られた緑色の目。

形のいい鼻にほのかに色付いた唇。

生成色のシャツはごわごわしていて私たちが普段着ているものよ

り繊維が粗い。

その上から羽織っている丈の長い深緑色のベストは、100パーセント皮です！ と見るからに主張している茶色の革紐を幾重にも腰に巻いて留められている。

革紐には粗布で作られた小袋がいくつかついていていた。おそらくウエストポーチ的な役割を果たしているのだろう。背には短弓と矢筒を背負っている。ズボンは生成色のゆったりとしたもので、ロング丈の編み込みブーツを履いていた。

呆れるくらい完璧なRPB的エルフスタイルだ。そしてカーペクトの上を土足だ。

ツッコミ所はいつくもあつたけれど、私の目は少年の巻き毛に戻つた。

見つけた。

なにをかはわからない。けれど私は迷えず、抗えず、少年へと手を伸ばし。

「な、なんですか？」

何故か顔を赤らめてもじもじしている少年の頭を両手でガシツと掴んだ。

「わああっ!?!」

ワシャワシャワシャーッと、巻き毛をおもいきり掻き乱す。少年は必死で頭を持ち上げようとしますが、上からグイグイ抑さえつけ

た。ほどなくして硬い感触に巡り会う。それを掴んで巻き毛の中から取り出した。ブチブチと何本か毛が抜けて少年が痛みのおまり情けない声をあげながらしゃがみ込む。最初からそうやってしゃがんでくれてたらよかったのに。理不尽な考えが頭をよぎる。

「あつた」

そつと掌を開くと、ポウツと光が溢れる。

少年の巻き毛の中から見つけたそれは、小指程度の大きさだったけれども、確かに小さい頃見つけた謎の物体Xと同じものだった。

「ああーっ！ クリスタル！」

つむじを押さえていた少年が私の手の平の上に浮いている謎の物体Xもといクリスタルに飛びつく。するとクリスタルはふわりと少年の手から逃れるように浮き上がり、ひゅんつと予想外の速さで飛び込んできた。

7

どこに？

私の口の中に。

「ああーっ！？」

少年の絶叫むなしく、ゴクンと飲み下す。……うん、まあ、お約束だよな。

「吐いて！ 吐いてくださいーっ！」

「ムリムリムリ、そんな器用なことできないって」
「そんなあ……」

『ORZ』の体勢でうなだれる少年。可哀相ではあるが、私だつて今回は好きで食べたんじゃない。別に美味しくないし。ていうか味ないし。硬い感触が喉を通つていっただけだった。

なんとなく腹をさする。なんか、お腹ほかばかしてきた気がするなげ。

「おおっ?」

突然、視界が青白くなった。びっくりして後ろに下がろうとする
と、「いけない!」とかなんとか言つて少年が羽交い締めにして
くる。ええーっ。下を見ると、複雑な模様が青白く浮かび上がつて
いた。

「魔法陣的な……」

「魔法陣ですよ!」

金髪碧眼に正しい日本語に修正されてしまった。そういえば日本語通じるよなあなんてズレたことを考えながら、私はまばゆい光に耐え切れずにギョツと目をつむった。

そこからはなぜか、意識がフェードアウト。

1 貴女は突然すぎる（後書き）

「小説家になろう」の存在を知って数日、たまらなくなつて書きだした初のオリジナルファンタジーの異世界トリップものです。未熟者ですがよろしくおねがいたします。

2 貴女は冷静すぎる

……ん。

んー……ん？

……うん。なんかさ、賭けていいよ。

多分私、人間下に敷いてる。

「やっぱり」

目を開けてまず確認したことは、綺麗に下に敷くようにして先程の少年を潰しているということだった。そろそろと起き上がって地面に降りる。うあ、スリッパだよ。いや確かに私は先程まで自分の部屋にいたんだからスリッパ履きなのはおかしくないのだけれど、なんか、いつの間に森的な場所にいるんだよねー……どこよここ。

四方八方見渡しても森である。見上げれば青空である。あまりの大自然ぶりに途方に暮れてしまう。夢かな、と思ったけれど、そう思い込めないくらい私は聡明だった。

ああ、自分の賢さが憎い……。

「んん……」

軽く身じろぎをして少年が目覚めます。上半身を起こしてしばらくボウツとしていたけれど、宙にさ迷わせていた視線が私にたどり着くとクワツと目を見開いた。

「クリスタル!!」

お前はそれしか喋れんのか。

「相も変わらず私のお腹の中だけだ」

そう言つと、少年はクシヤツと顔を歪ませた。あ、泣くのかな。そう思つて、私は黙つて少年を見ていた。慰めるつもりがないから他にすることないし。

しばらく身を震わせていた少年は、一度大きく息を吸い込むとスツと立ち上がった。なぜか凜々しい顔付きになっていた。気のせいかもしれないけど。

少年は辺りを見回すと、「ヴィンデの森か……」とつぶやく。

それから右手の人差し指を出すと、なにかを描きはじめた。少年が指を滑らせたところに青白い光が走る。少年はまず綺麗な円を描くと、その中に複雑な模様のようなものを書いていった。おお、すうい。

興味を持ってじーっと見ていた私は、そのうちあるとんでもないことに気がついてしまった。

だいぶ崩してはあるが、それが日本語であることに。

……ええー……。

陳が完成すると、それは自動的に拡大して青白い光を放ちだし、同時に陳の中から鷹を象並にでかくしたような動物が出てきた。鞍と手綱がついていることから交通手段に使われているということがわかる。

それを見て大きく頷くと、少年は手で合図をした。すると、鷹みたいな奴はスツと身を屈める。

「この森を抜けます。乗ってください」

ほほう、これに乗れとな。よく飼い慣らしているようで、ソイツはジツと少年を注視したまま動かない。でもこんなでかいのにどうやって乗れっていうんだ。とりあえず近付いていつてはみるが、やはりできる気がしない。

少年を見ると、少年は極自然に私に近づいてきて、極自然に腰と膝裏に手を回すと持ち上げた。私を。イヤンお姫様だつこ。

かわいらしい見た目とのギャップに戸惑って何も言えないでいるうちに（あと若干恥ずかしい）、少年はその細腕で私のことを抱き上げたまま少年はフワリと浮いて鷹みたいな奴の背に乗る。……浮いたよね今。コイツの周りだけ重力存在しないのか？ それともエルフ装備は伊達ではないのか？

少年は私を彼の前におろすと、後ろから両手を回して手綱を握る。なんだこの無駄な特等席。掴むところがないから悩んだあげくに首あたりの羽毛を握った。ちぎったらごめんよ。

「オルテンシアの町に」

少年の声に一声鳴くと、鷹みたいな奴はノツシノツシ歩き出す。え、飛ぶんじゃないんだ。ご主人様と違ってその羽は伊達か。まあこの方が安全でいいけれど。

最初は揺れで落ちるのではないかと身構えていたけれど、少年ががっちりフォールドしてくれているので問題なかった。しばらく獣道を進むと車輪の跡のある広い道にでて、それからはその道をひたすらまっすぐ進んでいる。ノツシノツシ歩きは車と比較にならないほど遅いけれど、自分で歩くよりマシだ。ちよっとお尻痛いけれど。

「さて。森を抜けるのはいいんだけどさあ、そもそもなんで私森にいるの？」

慣れてきたところで少年に尋ねると、手綱を握る手がビクツとわかりやすいくらい震えた。

「それは……」

黙り込んでしまった少年はとりあえず置いておいて、足先に引っかけかっただけで不安定なスリッパを脱ぐ。森のお友達！ みたいな格好の少年と違って真っ白なワイシャツの上に灰色のカーディガンを羽織り紺色のブリーツスカートを履いている私は、明らかに場違

いだ。

「わかりません。突然転移魔法が発動して……」
「ていうか魔法で」

今更ではあるが突っ込まずにはいられない。魔法で。しかもなんかさっきの日本語使われてたし。もしかしたらその転移魔法の魔法陣の模様も、あの時は気づけなかったけれど日本語だったのかも知れない。

「マホウテ？」

「……………」

うーん、乱れた日本語が通じない。まあ通じたら通じたで考えものだけど。

しかし転移魔法、ねえ。そりゃああれは転移魔法でしょうよ。こうやってマンションからどこぞの森に移動したしね。だけれども魔法って。魔法ってなによって言いたいんだってば。そんな馬鹿なフアンタジーな。まあ、実際身をもって体験しちゃったから信じるしかないんだだけどさ。

「じゃああのとんでも厨二設定も……………」

「トンデモチユウニ？」

本当ってことか。ということは私が食べちゃったのは悪しき者が狙っているクリスタルで、そして少年の行動を見る限り、ここは少年の世界だと考えられる……

うーん、なんかとんでもないことになっているなあ。今更だけど。

「私の名前は星野湊。アンタは？」

今更ついでに自己紹介としよう。ようやく意味の分かる言葉が投げかけられてホッとしたのか、少年は明るくはきはきと「ルルです！」と答える。へえ、ルル。女の子みたい。顔も合わせてますます女の子みたい。きつとちっちゃい頃はさぞや可愛い女の子に見えるたんだろうなあ。残念。

「この鷹みたいな奴は？」

「えーと……？」

「この子」

ルルはちよつと戸惑ったみたいだけれど、私が指すと「ああ、××××ですね」と言った。

うん、なんて言ったかわかんなかったぞ。

こつ、日本語の中にいきなり流暢な英語が混じったみたいな感じ。聞き取れません。

名前はかろうじて聞き取れた。『キルシュブリューテ』とかんとか。聞き取れたけど『シュ』とか『リュ』とかの部分の発音がネイティブすぎて日本人には手も足もでないので、心の中だけで呼ぶことにした。そういえば、町の名前やルルの名前のイントネーションも若干違ったな。外国人が日本語喋った時のやけに抑揚ついた感じみたい。見た目が外人だからそこまで気になってなかったんだけど。うーん気になる。気になるけど、ルルに聞いてどうにかなるものでもない。ひとまず置いておこつ。

「あー、ルル。私のことは湊でいいから」

「ミナト……？」

「そう。星野は名字」

「名字……ミナトは貴族なのですか？」

そうきたか。確かにルルは名字なんて名乗んなかったもんなー。ルルに理解してもらうために、わざと別の切り口から話し出す。

「ルルも見たでしょ？ 私の住んでいた場所。こことはずいぶん違ってたんじゃない」

「あ、はい。見せていただいた箱も、なんなのかさっぱりわかりませんでした」

携帯ね。

「あそこはここと違うの。だから貴族じゃなくても名字があるのよ」
「……貴族という階級はあるのですか？」

「ああ、昔あつたけれど撤廃されたわ。そうそう、王様とかもいないの。基本平民しかない」

ルルはずいぶん驚いたみたいだけれど、「わかりました」といって頷いた。なかなか理解が早い。

「……ミナト。これから僕は、貴女にとっても酷なことを言います」

ルルはしばらく黙っていたけれど、意を決したのかハッキリとした口調でそう言った。声を聞いただけでも緊張が伝わってくる。体をねじってルルの顔をのぞいた。真剣な表情のルルと、目が合う。

「貴女の理解している通り、ここは貴女の住んでいた場所とは違う場所です。世界が違うといっているいいかもしれません。どうやら僕が持っていたクリスタルの欠片が、貴女の体内の欠片に反応して貴女

の元へ導いてくれたようです。そして、貴女の中の欠片は更にクリスタルを求めてこの世界へと貴女を呼んだ」

「つまり……私ってばクリスタル探索機的な機能があるの？ あー、クリスタル探索機能があるの？」

「つまりそういうことです」

「で、ルルはそんな私の力が必要なの？」

「ええ」

お、はつきり頷きましたよ。うんうん、下手にごまかされるより気持ちいいわ。

「それに……」

ルルはそつと目を伏せる。言葉の続きを待ったけれど、ルルは小さく首を振って「なんでもありません」と言った。え、ちょ、気になるんですけど。それはないわー。

「ミナト」

「なに」

「決して危険な目には逢わせません。すべてが終わったら元の世界に帰すことを約束します。ですから、僕の旅についてきてくれませんか」

そう言って、ルルは再び私の目を見つめる。

……ふーん。まあ、不安要素は多々あれど、クリスタルが私の体内にある限りルルが私を見捨てないっていうのは確かか。

「いよ」

打算てんこ盛りの私の返答に　　ルルは、泣きそうな顔で笑った。

ちよ、ほんとひっかかるなーもー。

3 貴女は喋れなすぎる

「ここがオルテンシアの町です」

森を抜けると今度は畑になった。なにを栽培しているのかはわからないけれど、日本とそんなに大きく変わらない風景が延々と続く。違いといえば畑の近くに家がないところだろうか。ルルに聞いたところ、夜はモンスターや盗賊が出て危ないから人々は町を作り一カ所に身を寄せて暮らしているらしい。畑に通うの大変そうだと言うと苦笑された。どんなに大変でも命には代えられないって。まあそりゃそうだ。ていうかモンスターで。

というわけで、オルテンシアの町は門があつて門番がいた。そこそこ大きい町は、二階建て程度の高さの門壁にグルリと囲まれている。私たちが近づくと、数人いる門番はなぜか驚いてワタワタし始めた。不思議に思つてルルを伺い見ると、「xxxxxをあまり見たことがないんでしょう」と苦笑が返ってきた。てつきりメジャーな生き物だとばかり思っていたけれど、どうやら彼らはキルシュブリユーテに戸惑っているらしい。

「降りますよ」

門の手前で、ルルは私に一言かけるとまたしてもお姫様だっこをして降りた。相変わらず重力を無視している。そして私を降ろす指で魔法陣を描き、キルシュブリユーテをどこぞへ消す。門番が感嘆のため息をついた。こんなことができるのも常識ではない、ってことかな。

気を取り直して、門番のうち一人が話し掛けてくる。

ほどネイティブな人間はほぼいないそうだ。もしそんな人間がいたら、それはかなりの使い手と見て間違いないらしい。

「私が使ってるのは母語なんだけど……」

「ならミナトは魔族なんですか？」

「いや、人間のはずなんだけど……」

「ならかなりの使い手ですね」

駄目だ。言葉は通じてもお互いの生まれ育った環境が違いすぎて話を通じない。

「そういえば、ルルは人語が喋れるのね」

「ええ。僕たちのような人に近い姿形をした魔族は、人と関わって生きていきますから人語が喋れないと生活していけないんです。むしろ、魔語を普段使わない者も増えてきていて……」

ルルは顔色を曇らせる。なるほど、魔語は人語に押され気味なのね。

「ルルが魔語を喋れてよかった」

「え？」

「だって、そうじゃなきゃ私困ったもの」

ガチで。この状況下で意思疎通ができないとか笑えない。

ルルはキョトンとしてから、頬を染めて嬉しそうに笑った。

「おつたまげたー」

「え？」

「いや、なんでもない」

自然あふれる服装をしているもんだからてつきりお金がないんだ
と思っていたのに、ルルは迷う事なく町の中で一番高そうな宿屋の
前に行くと「今夜はここに泊まりましょう」と言った。

私のつぶやきにルルは不思議そうな顔をしたけれど、「はいりま
しょう」と宿屋の中に入っていく。

宿屋の作りはホテルとそう大きくは違わなかった。入って正面に
受付があつて、受付嬢がにっこり微笑んでいる。ああ、あんなに親
しげなのに言葉が通じないとか……ショックだ……。

「受付を済ましてくるのでちょっと待っていてください」

ルルに言われたのでエントランスホール的なこの適当な椅子に
腰掛けた。暇なので人間観察でもしようかと思つて、逆に周りにジ
ロジロ見られていることに気付く。あー、そりゃあ目立つか。明ら
かに周りから浮いた服だもんな。負けじと見返すと視線を反らされ
た。ザマア。なんだか気分がよくなつてやり返しまくる。

そうしているうちに、大体この世界の人がどんなナリをしている
のかがわかつた。だいたいヨーロッパ系の顔立ちで色素が薄い。服
装はここがお高い宿屋だから上流階級しかみれなかつたけれど、ま
あ中世ヨーロッパパモチーフのファンタジー系でよく見かけると言え
ばいいのだろうか。貴族っぽい服とか騎士っぽい服とか魔法使いいっ

っぽい服とか着ている。きつとそいつらは見た目通りの身分なんだろう。きつと庶民は庶民っぽい服だ。わかりやすい世界だなー。

ということで、エルフ装備のルルの服装も宿屋では中々目立っていたけれど、女子高生装備の私は完全悪目立ちしてんだなこれが。

まず服装を改めなきゃなーと思っていると、騎士っぽいお兄さんたちが三人連れではいつてきた。受け付けにはルルがいるから、お兄さんたちはルルが終わるのを待つことになる。20代そこそこのまだ学生気分が抜けてなさそうなペーパーだ。学校あるのか知らないけど。ボーツと観察しているとそのうちの一人と目が合った。すると、ソイツは隣にいる男の肩を叩いて私を指す。んー？ なんか嫌な予感がするなあ。

「×××××」

「×××××」

効果音をつけるなら、ニヤニヤ。お兄さんたちは私に近づいてきて取り囲むとペラペラ喋り出した。ふふ、言い返そうにもなんて言ってるかわかんないや。困ったなあと思いつつも日本人らしくへらへらーっと笑っていると、無言は肯定と受け取ったのかなんのか知らんが腕を掴まれた。

「あ、こら。触んな」

そう言っ腕を振り払……うーん、かなりがっしり掴んでくれちゃってますねお兄さん。お兄さんたちは私が喋った言葉がわからなかったみたいで、ちよつと驚いて顔を見合わしたが、ニヤリと笑った。あらら、悪い顔だなあ。

「×××××」

ようやくルルが何か叫びながら駆け寄ってきた。周りのお客もなんだなんだとこちらを見ている。

「xxxxxxxx」

ルルが何かを言うが、お兄さんたちは笑っているばかりで私を解放してくれない。それどころかルルのことまでいやーな目付きで見ている。確かにお兄さんたちより細いけどルルは男だよー。ルルもなにか感じ取ったのか、いつでも動けるように身構える。

そんな一触即発な雰囲気の中、その人物は現れた。

ていうか入口から入って来ただけなのだが、私たちが揉め事を起こしているのがエントランスホールの真ん中らへんというはた迷惑な場所なもんだから強制エンカウト。しかもルルも私もお兄さんたちも一斉にその人を見るもんだから、関わらずにはいられない雰囲気だ。それでも目を合わせないようにしてコソコソ脇を通っていけば回避できたかもしれないが、その人は悠長に顎に手を添えて私たちを観察すると、おもむろに口を開いた。

「xxxx」

うん。なにを言っているのかわからない。

お兄さんたちが色めき立ったけれどなんでだかよくわからない。駄目だこりゃ。

やることもないので観察してみる。歳はお兄さんたちと同じか上かだろっけど、比べものにならないくらい落ち着いた雰囲気をもっている。服装は貴族のお坊ちゃまっばいが、腰から剣を提げている。お飾りのレイピアなら何人かいたけれど、あれは両刃剣だろう。青みがかつた黒髪にアイズブルーの瞳。切れ長の目にスツと通った鼻筋の、ルルとは系統の違う美形さんだ。ルルが可愛い系ならこっちはカッコイイ系かな。といつてもこれはあくまで外見だけを見た場合で、青のお兄さんはその美貌が台なしになるような表情を浮かべている。いくなればヘラツ。明らかに三枚目キャラの笑い方である。

それからお兄さんたちVSルルと青のお兄さんという布陣で攻防が続き、お兄さんたちが悪態をつきながら宿屋から出て行くことで事態は収拾した。うーん、悪態だけはわかったけれど、他はもう何がやら。追いてけぼりになっていた私に、青のお兄さんが近づいてくる。

「xxxxx」

うーん、何て言っているかわからない。ルルが慌てた様子で青のお兄さんに話し掛けると、青のお兄さんは驚いた表情をしてから納得した様子を見せた。うむ、おそらくルルは私が喋れないことを説明したのだろう。

お兄さんは再び私を見る。どうするんだろっと思つて観察していると、ヘラツと美形台なしの表情で笑った。

「だいじょうぶ？」

ルルと違って片言だったけれど、青のお兄さんは確かにそう言っ

た。ようやく意味のわかる言葉を投げかけてもらえて嬉しかった。
ともあり、自然と頬が緩む。

「ありがとう」

私の言葉に、お兄さんはやっぱりへラッと笑った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0975q/>

貴女は強すぎる

2011年1月16日07時44分発行